

写真でふりかえる 昭和・平成の酒田

開催期間

令和元年6月22日(土)～9月2日(月)

1. 酒田の変遷

酒田市域の拡大

昭和4年(1929)に、酒田町と鶴渡川原村(現在の亀ヶ崎地区)が合併。町から市になる人口条件を満たしたため昭和8年(1933)4月1日、待望の「酒田市」が誕生した。

その後昭和16年(1941)に西平田村および中平田村、西荒瀬村の一部と合併、昭和25年(1950)に飛島村と合併した。

昭和28年(1953)、町村合併促進法が施行されると、翌29年(1954)8月に、西荒瀬村、12月に、新堀、広野、袖浦、東平田、北平田、中平田、上田、本楯、南遊佐の9か村が編入する大合併が行われた。

周辺では、同年に南平田、田沢、北俣の3か村が合併して平田町になり、日向、大沢、一條、観音寺の4か村が合併して八幡町になった。昭和30年(1955)に松嶺町、内郷村、上郷村の1町2村が合併し、松山町になった。

平成17年(2005)11月、酒田市、八幡町、松山町、平田町の1市3町の合併により、新しい酒田市が誕生した。

「酒田町」ではなく「酒田湊」と書かれた引札 明治期 田中商店発行



明治22年(1889)施行の市制・町村制によって山形と米沢に市制が施行され、続いて大正13年(1924)に鶴岡にも市制が施行されたが、酒田には町政が施行された。

港で繁栄した輝かしい歴史を持つと自負している酒田町民にとって、他都市に遅れをとったことは屈辱的だったようで、酒田町の商工業者の中には「町」と称することを嫌って、手紙や広告などには「酒田港(湊)」と称する者が多かった。

市制施行を祝う仮装行列 昭和8年(1933)7月24日



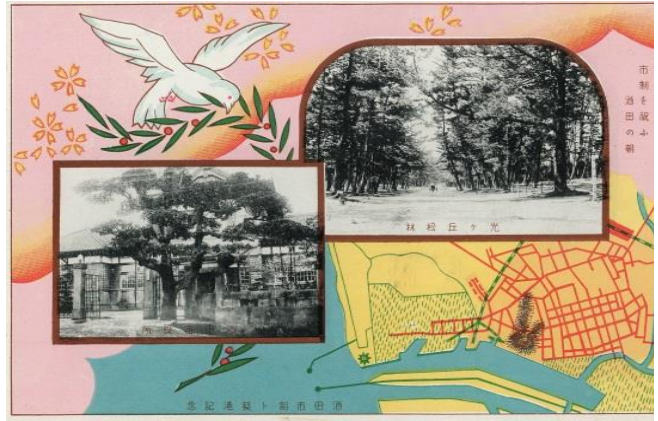
市制施行当日午前0時、山形県自由新聞社が2発の花火を打ち上げた。

同日の山形新聞は「三萬町民隠忍四十年、報られるけふの喜び 今は一片の淡い想ひ出 旧き都に栄光高し」「歡喜に湧立つ血潮 全町挙げて祝賀の嵐」の見出しで待望の市制施行を報じている。正午には、報知新聞社の飛行機が上空に飛来し「祝市制施行」のピラをまいて飛び去った。

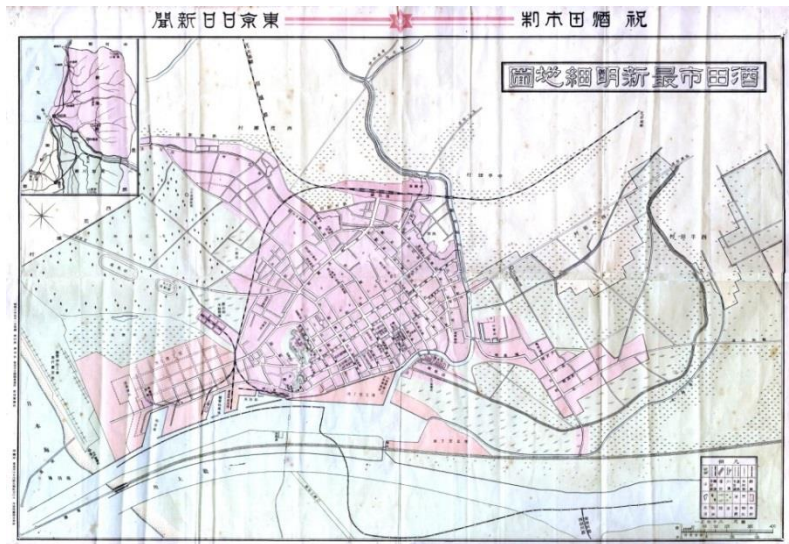
この他、日枝神社で市制施行報告祭、新聞社主催の旗行列、市民歌レコードの発売、提灯行列、市制施行記念講演会、芸術祭、仮装行列、花火大会など祝賀行事が多数行われた。



市制施行当時の酒田
昭和8年(1933)



市制施行記念絵葉書
昭和8年(1933) 中村書店発行



「祝酒田市制」酒田市最新明細地図
昭和8年(1933) 東京日日新聞発行



市制施行を記念して
配布された扇子
昭和8年(1933)



合併を祝うパレード
昭和29年(1954)

メッセージ
酒田市長 本間重三
鳥海の山容愈々美しく 最上の流れ清らかな郷土に育まれ今茲に新酒田市の首途に際し貴下の御協力に絶大なる信頼を寄せ深き縁の下に共に手を携え新市建設の聖なる任務を遂行せんとするものである

聲明書
今回町村合併促進法の施行とその精神に基づき、大酒田市建設計画に概ね貴市からの合併要望に応え、懇村に賛同し、急ぎ合併を見込みに到りまじること、は、貴市と共に同慶至りと信ず、今後私共は大酒田市の一翼として、その理想実現のために邁進することと、誓ひと共に貴市の恩恵に親倚し、生誕発展せんことを祈ります
昭和二十九年十月三日
新穂村長 山本武夫
酒田市長 本間重三殿

メッセージ
此の度地方自治振興と確立の爲に、先づ旧市を去りて、新しく酒田市に合併するに至ったことは、洋に慶祝にたえぬ所であり、私共は、此の意義ある前途にあり、住民と共に産業の発展を図り、文化の向上に貢献し、以て市民の福利増進に寄与することを誓ひ、共に大酒田市の発展を祈念するものとす
昭和二十九年十月四日
元浦村長 佐藤房之助
酒田市長 本間重三殿

メッセージ
十二月一日とト、些かの蟠りもなく、因満裡に酒田市へ合併することが出来、中平田地域住民、参千有四百人と代表し、衷心より祝意を表すことの出発点とす、私の此の上なる光榮である感謝に堪えないところであり、今後は酒田市民としての襟度と誇りを持って、善処し、大酒田結、以て港都酒田農工商一体の大酒田市の建設に努力することと、誓ひ、その隆盛と発展あらんことを祈つてやみません
昭和二十九年十月四日
元中平田村長 小松伴秋
酒田市長 本間重三殿

合併にあたって書かれた市長・各村長からのメッセージの一部 昭和29年(1954)



酒田市開庁のテープカット
平成17年(2005)11月1日
酒田市広報提供



酒田市開市式
平成17年(2005)11月1日
酒田市広報提供

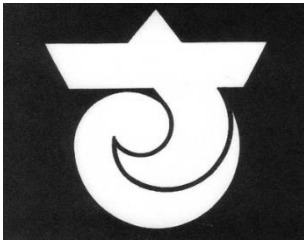


酒田市開市式次第
平成17年(2005)
11月1日



昭和38年までの市章

大正4年(1915)、酒田駅が建設されたことを記念して町章として制定され、市制施行以降もそのまま市章として用いられた。「酒田」と行政をつかさどる「土」、農に通じる「土」、また「工」、「商」とさらに錨を図案化し、港町酒田を象徴したものの。



平成17年の合併までの市章

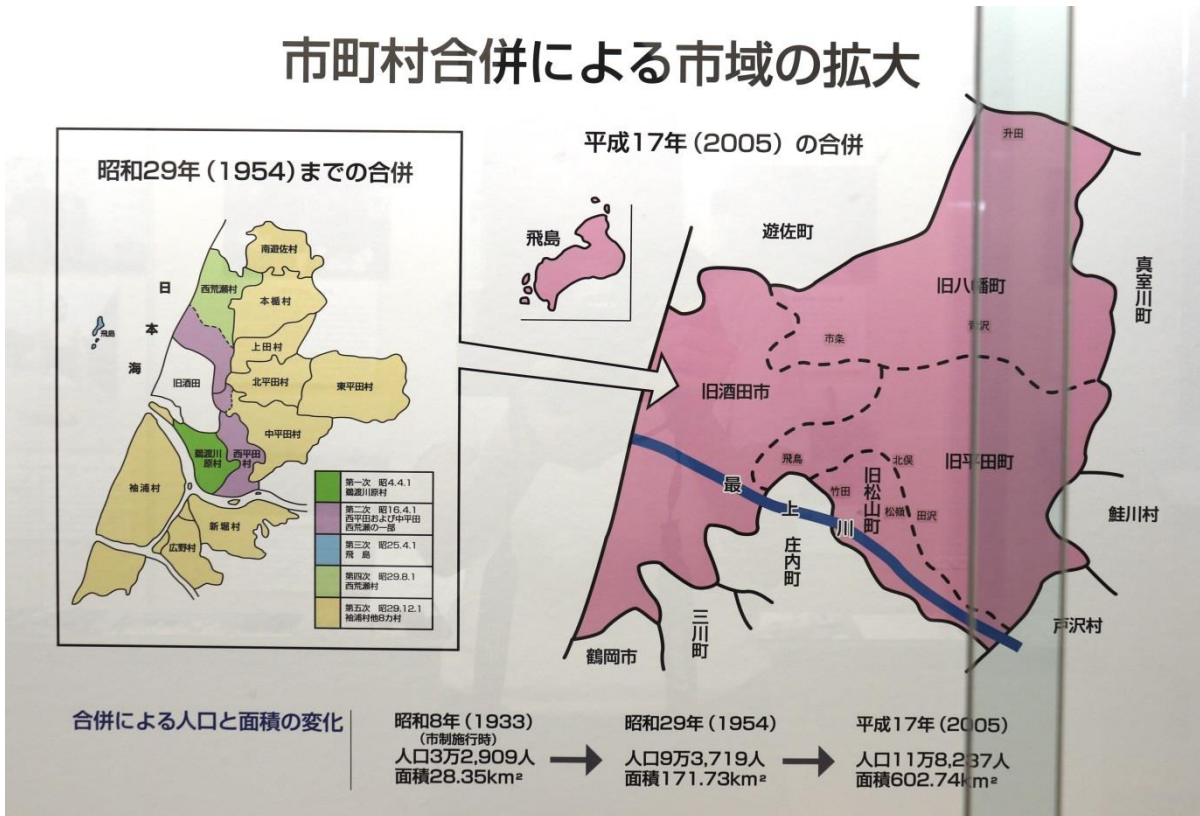
市制30周年記念として、昭和38年(1963)に決定した。酒田の「さ」に波頭で港を表現し、上部の翼状で酒田市の発展と円形で融和団結を表現したものの。



新酒田市の市章

頭文字の「S」を骨格として、日本海を表す青と、庄内平野、鳥海山を表す緑の間に、最上川の流れに見立てた4本の波(1市3町)が、未来に向けて羽ばたく様子を図案化した。

市町村合併による市域の拡大



2. 昭和50年代の酒田

昭和50年代の酒田

昭和50年代の酒田は、記録的な災害となった酒田大火からの復興、地域産業の発展が期待された住軽アルミの、操業後わずか5年での解散、観光振興に一役も二役も買ったおしんブームの到来など、酒田の未来を左右するような出来事が続いた、大きな変化の時代だったといえる。

このコーナーでは、昨年寄贈いただいた報道写真を中心に、この当時、酒田で起こった出来事をふりかえる。

◆柳小路マーケットの解体 昭和51年(1976)4月



長い間市民から親しまれながらも、交通や美観、衛生面などから問題にされていた柳小路マーケット56店が解体された。戦後、引揚者などの一時的な救済策で闇市として始まり、最盛期の昭和30年(1955)には、長屋式のマーケット約90店が営業した。解体から約半年後に発生した酒田大火では、柳小路に面した映画館グリーンハウスから出火した。風上だったこともあり、柳小路以西は延焼を免れたが、マーケットが撤去されていなかったら被害が拡大していたかもしれない。大火後は、ここに仮設店舗が立ち並んだ。

◆NTT酒田ビルのアンテナ落下 昭和51年(1976)10月29日



酒田大火当日、酒田では、発達した低気圧の影響で強風が吹き荒れ、午前9時には、最大瞬間風速28.7mを記録した。

この強風で、午前11時10分頃、酒田電報電話局(現NTT酒田ビル)の屋上に置かれていた直径4m、重さ500kgのパラボラアンテナが落下した。アンテナは駐車場の乗用車3台に落ちて壊したうえ、バウンドして乗用車1台を潰した。

この日は、遊佐町農協選果場の屋根が飛ばされたり、酒田市内の家の屋根瓦が落ちたりして負傷者が出るなど、強風による被害、大火の延焼の原因にもなった。

◆酒田の町を一変させた酒田大火

昭和51年(1976)10月29日、酒田は繁華街を中心に1,774棟を焼失する火災に見舞われた。戦後まれに見る大火となったこの火事は、「酒田大火」として全国に知られている。

火が発生したのは午後5時50分ころ。中町にあった映画館グリーンハウスから出火した。風速25mを超える台風並みの強風にあおられた炎は、風下の商店街、住宅地など約22.5haを一夜にして焼き尽くした。

この大火による人的被害は、死者1人、負傷者1,003人、被災者3,300人。被害総額は405億円にのぼり、同年11月24日には激甚災害げきじんに指定された。酒田は2年半で復興を遂げ、昭和54年(1979)5月19日復興が宣言された。



火元グリーンハウスと大沼デパート
昭和51年(1976)10月30日



復興した中町商店街

◆岸洋子大火復興資金チャリティコンサート 昭和52年(1977)3月31日



大火後、酒田市出身の歌手・岸洋子は、義援金募集あんぎやで全国行脚の公演をし、収益金を酒田市に寄付した。写真は昭和52年(1977)3月31日、市民会館で行われた時に撮影されたもの。

◆酒東が春の甲子園に出場 昭和52年(1977)3月



酒田東高校が第49回全国選抜高校野球大会に初出場した。庄内から初めての出場で、酒東野球部の健闘ぶりは市民に感動を与え、復興への励みとなった。

酒田東高校
甲子園初出場
記念はがき
昭和52年(1977)
酒田郵趣会発行



◆酒工が夏の甲子園に出場 昭和52年(1977)8月



酒東に続いて、酒田工業高校が第59回高校野球選手権大会に初出場を果たし、1回戦で宮崎県の都城高校を5対2で破った。

写真：個人提供

◆酒田出身力士・若瀬川^{わかせがわ} 伊勢ヶ浜部屋^{いせがはま}に入門 昭和53年(1978)3月



左：酒田駅で撮影された、上京直前の若瀬川(写真右) 昭和53年(1978)

右：酒田巡業で化粧まわし姿の若瀬川 昭和57年(1982)

昭和53年(1978)、若瀬川(本名 佐藤^{わたる} 互)が、酒田三中を卒業し伊勢ヶ浜部屋に入門した。同年の3月場所で初土俵を踏み、昭和55年(1980)9月場所では18歳の若さで十両に昇進した。昭和58年(1983)、酒田出身力士として初めて幕内力士となった。最高位は東前頭筆頭(平成元年3月場所)。平成4年(1992)7月場所を最後に現役から引退した。平成5年(1993)に酒田市特別功労表彰を受賞した。平成23年(2011)、49歳の若さで没した。

◆酒田大火復興式典 昭和54年(1979)5月19日



大火からわずか2年半で復興を成し遂げた酒田。市民会館で開催された大火復興式典では、市長と被災した浜田小学校の児童が復興宣言を読み上げ、会場から大きな拍手がわき起こった。式典は復興太鼓の音頭で幕を開け、伝統的な獅子舞、復興体操、被災園児のひまわりマーチ踊りのあと、大火の記録映像「炎の軌跡」の一部上映、防災の歌「明日に生きる酒田」の演奏と続いた。

写真：酒田市広報提供

◆酒田北港開発について

酒田港の発展に伴い、宮海の海岸に酒田北港を建設することになり、昭和45年(1970)8月に起工式が行われた。北港後背地の企業進出にあたっては市民から公害を懸念する声が高まり、県・市と市民の対話集会在が度々行われた。住軽アルミと酒田共同火力発電所の建設工事が始まると、公害反対闘争は一層激しくなった。飽海地区労働組合会議を中心に市民運動も加わって現地に座り込み、工事停止を要求する反対運動が起こった。開発のために大量の黒松が伐採されたことで、公害反対の機関紙「くろまつ」も発行された。市は大浜の各会社と公害防止協定を結んでいった。

このような状況のなかで、着工から4年の歳月をかけて昭和49年(1974)11月に北港古湊埠頭^{ふとう}第3号岸壁が完成し、ソ連船第1船入港を機会に北港開港式典を行った。昭和52年(1977)には北港後背地に住軽アルミが操業し、隣接の共同火力も運転を開始するなど、臨海工業団地が形成された。

◆^{すみけい}住軽アルミの操業開始 昭和52年(1977)1月



北港後背地の住軽アルミ酒田工場が操業を開始した。住軽アルミは北港開発の基幹産業として誘致され、地域産業発展の柱として期待された。

しかしその後、オイルショックによる電力コストの高騰や構造不況^(※)により、昭和57年(1982)、操業から5年で解散した。景気の後退期でもあり、市は「特定不況地域」の指定を受けた。

※構造不況…景気循環に伴う全般的な不況ではなく、特定の産業が、産業構造・需要構造など経済の変化への対応が遅れたために陥る不況。

◆日ソ沿岸市長会議 昭和56年(1981)5月



昭和56年(1981)5月、第8回日ソ沿岸市長会議が開催された。酒田市初の国際会議で、日本側19市、ソ連側11市が参加した。

日ソ沿岸市長会(現在は日ロ沿岸市長会)は、昭和45年(1970)、日本の日本海沿岸をはじめとする地域と、ロシア連邦極東シベリア地域の親善友好と経済協力を促進し、両地域の発展を図ることを目的として設立された。

昭和54年(1979)、ウラン・ウデ市で開かれた第7回日ソ沿岸市長会議では、酒田市とジェレズノゴルスク・イリムスキー市との姉妹都市の盟約を締結、調印した。現在にいたるまで毎年(平成23年を除く)使節団の相互派遣を行い、相互理解を深めている。

◆松山能 庄内文化賞に 昭和57年(1982)10月



庄内地方で文化活動に功績のあった団体に贈られる第4回庄内文化賞に、松山能振興会が選ばれ、昭和57年(1982)10月26日、市役所で同賞の授与式が行われた。歴史公園の竣工を記念して行われた松山城大手門前での新能は、毎年恒例行事となっている。

松山能は、寛文年間(1661~73)、松山藩主酒井忠恒ただつねが、江戸勤番きんぼんの松山藩士に能楽を習得させ、藩の式楽しきがく(※)としたことに始まったと伝えられる。明治維新後、武家から町方に伝わり演能団体「松風社」しょうふうしゃによって受け継がれ、以後現在まで継承されている。昭和55年(1980)に県の無形民俗文化財に指定された。写真は昭和54年(1979)7月に撮影されたもの。

※式楽…儀式に用いられる芸能。

◆酒田市制50周年 昭和58年(1983)



昭和8年(1933)の市制施行から50周年を迎え、全国市長会港湾都市協議会総会、青少年芸術劇場のバレエ公演、タイムカプセル埋設事業など多彩な記念事業が行われた。写真は、4月2日に市民会館で行われた記念式典の様子。

◆日本海中部地震 昭和58年(1983)5月26日



秋田沖でマグニチュード7.7の強い地震が発生し、酒田では震度4を記録。日本海沿岸で津波が発生した。酒田港内では約2時間にわたり1m以上も水位が変化し続け、いたるところで大きな渦が発生した。酒田海上保安部が港内に停泊中の漁船に避難を呼びかけたため、漁船約80隻が一斉に沖へと避難した。酒田では人的被害は無かったが、飛島の勝浦港と法木港では漁船8隻が転覆、流失し、袖岡埠頭では係留中の小型漁船が、転覆するなどの被害が出た。

◆ドラマ「おしん」ブーム 昭和58年(1983)



酒田が舞台となったNHK連続ドラマ「おしん」が大ヒットし、「オシンドローム」と呼ばれた大ブームが巻き起こった。酒田では、おしん像を駅前に設置したり、少女時代のおしんを演じた小林綾子を酒田港まつりに招待。酒田を訪れる観光客も激増した。

今年4月から再放送され、再び話題となっている。

←いろいろなおしんのお土産品



山居倉庫で行われた撮影のようす



おしんグッズを売り出していた人形の大泉

◆県内各地で最高積雪を記録した大寒波 昭和59年(1984)1月



1月15日午後から降り続いた雪は、県内各地で最高積雪を記録した。県内には、暴風雪、波浪、異常低温警報が発令された。庄内地方では地吹雪がひどく、国道7号線や47号線が一部通行止めになった。身動きがとれない乗用車やトラックは約100台にのぼり、市の雪害対策本部は、炊き出しのおにぎりや缶コーヒーを現地で配布した。酒田港は一部氷結した。

翌月7日も、寒波のため水道管の破裂が相次ぎ、200軒で断水したため、給水車が出動した。

◆鳥海山へり墜落 昭和59年(1984)4月8日



鳥海山7合目の川原宿付近に春スキーに向かう客を乗せたヘリコプターが墜落した。雪による視界不良が原因だった。乗員乗客7人が重軽傷を負って、救助隊が来るまでの間、山中に取り残された。

◆第1回酒田どんしゃんまつり 昭和59年(1984)10月



酒田の秋祭りは、大火翌年の昭和52年(1977)から「大火復興感謝祭」として商店街で大売り出しをしたのが始まりだったが、市制施行50周年を迎えた昭和58年(1983)に「こばえちゃ祭り」と改称。その翌年の昭和59年(1984)に「酒田どんしゃんまつり」と改称して続けられた。

「どんしゃん」という言葉は、舟を呑むほどの大魚どんしゅう「呑舟」がその語源とも言われ、酒田甚句の詞にも「毎晩お客はどんどんしゃんしゃん…酒田は良い港 繁盛じゃおまへんか」と景気よく歌われており、商売繁盛を願って名付けられた。

前夜祭では、イメージソング『酒田どんしゃん』を作曲した寺内タケシのコンサートが行われている。

昨年から「さかた大繁盛ハロウィンまつり」に改称されている。

◆宮野浦海水浴場オープン 昭和54年(1979)7月20日



宮野浦海水浴場がオープンした。
現在この海水浴場は使用されていない。

3. 故郷に貢献した人物

酒田市名誉市民・特別名誉市民

昭和50年代頃、酒田のために各分野で尽力した酒田市名誉市民・特別名誉市民を紹介します。
 名誉市民とは、酒田市の住民または酒田市と特別に縁故の深い方で、政治、経済、産業、教育、文化その他広く社会の進展に貢献し、市民から等しく郷土の誇りとして深く尊敬されていると認められる方に対して、その功績をたたえ議会の同意を得て、贈呈する称号です。

ここで紹介している方のほかに、株式会社平田牧場創設者の新田嘉一氏、テノール歌手の市原多朗氏がいます。

特別名誉市民とは、名誉市民に該当する方がお亡くなりになったときに、その功績をたたえ、ご遺族に対して贈呈する称号です。

土門 拳 写真家 明治42年(1909)～平成2年(1990)



撮影：菅原幸男

酒田町(現酒田市)に生まれる。

徹底したリアリズムにこだわった報道写真や、寺院仏像など日本の伝統文化を独特の視点で切り取った作品を発表し、代表作に「古寺巡礼」「筑豊のこどもたち」「ヒロシマ」などがある。

主な受賞としては、第1回アルス写真文化賞をはじめ、毎日出版文化賞、毎日写真賞、日本写真批評家協会賞、毎日芸術賞、芸術選奨、国際報道写真展金賞、仏教伝道文化賞、朝日賞など多数。氏の作品は国内外で高く評価されている。

昭和48年(1973)に紫綬褒章^{しじゅほうしょう}、同55年(1980)に勲四等旭日小綬章^{きよくじつしょうじゅしょう}を受章、昭和49年(1974)、酒田市名誉市民第1号になり、これを機に土門拳記念館が設立された。

加藤 千恵 声楽家 明治37年(1904)～平成3年(1991)



酒田町(現酒田市)に生まれる。酒田高等女学校(現酒田西高校)、東京音楽学校(現東京芸術大学)を経て、大阪、京都の高等女学校に勤務。昭和15年(1940)、宝塚歌劇団に招かれ声楽教授になる。同時にNHK大阪中央放送局放送合唱団の指導にあたった。

終戦後の昭和20年(1945)に酒田に戻り、翌年、浄福寺の本堂を借りてボーカルスタジオを開設。酒田の子どもたち、社会人に声楽、合唱、ピアノを指導し、音楽の普及、後進の育成に取り組んだ。シャンソン歌手の岸洋子、テノール歌手の市原多郎もその門下生である。

昭和31年(1956)には、東北地方では初めてと言われる市民オペラとして「ミカド」を上演し、大成功を収めた。その後も「フィガロの結婚」「椿姫」を上演して好評を博し、酒田の音楽水準の高さを全国に知らしめた。

昭和40年(1965)に斎藤茂吉文化賞を受賞、同62年(1987)に酒田市名誉市民となった。

中村 恒也 元東北エプソン(株)会長 大正12年(1923)～平成30年(2018)



写真：酒田市広報提供

酒田町(現酒田市)に生まれる。酒田中学校(現酒田東高校)、日本大学理工学部機械工学科を経て、昭和19年(1944)に(株)第二精工舎・亀戸工場(現セイコーインスツル(株))に入社。終戦後の昭和20年(1945)に同社諏訪工場(セイコーエプソン(株)の前身)に転籍する。

昭和39年(1964)には、開発を推進した水晶時計が東京オリンピックの公式計時に採用され、日本の技術力を世界に大きく示した。

セイコーエプソン社長に就任してからは、製造工程からのフロン全廃に取り組み、平成4年(1992)までに実現。その技術を公開し、環境保護に貢献した功績により、翌年には米国環境保護庁「オゾン層保護賞・個人賞」を受賞している。

科学技術功労者表彰、藍綬褒章、勲三等旭日中綬章などを受けている。東北エプソン(株)の酒田誘致に尽力し、平成15年(2003)に酒田市名誉市民となった。

また、氏の寄付金をもとに創設された中村ものづくり基金を活用し、チャレンジものづくり塾やサイエンス発明教室など、子どもたちがものづくりに興味をもつような事業が毎年開催されている。

原 のぶ子 服飾デザイナー 明治34年(1901)～平成9年(1997)



写真：松山文化伝承館提供

松嶺町(旧松山町)に生まれる。松嶺尋常小学校高等科を卒業し、西田川郡東郷村尋常高等小学校で裁縫教師をしていたが、向学心と職業婦人へのあこがれから、共立女子職業学校(現在の共立女子大学)へ進学。卒業後は同校で教鞭をとる。

昭和9年(1934)、文部省の委託を受けて渡仏し、服飾デザインを学ぶ。パリにアトリエを持ち、その後の基盤となる洋裁知識を深めた。帰国後、日本で初めて「フランス式立体裁断法」や「フランス式洋裁教育」を導入した。

昭和17年(1942)に「原のぶ子アカデミー洋裁」(現青山ファッションカレッジ)を設立。同29年(1954)には、デザイナーの団体「サロン・デ・モード」を創立し、日本初のファッションショーを開催するなど、人材育成に尽力した。米沢女子短期大学の名誉教授なども務めた。

昭和51年(1976)、勲五等瑞宝章を受章し、同62年(1987)に松山町名誉町民第1号(現在は酒田市名誉市民)となった。

前田 巖 元酒田商工会議所会頭 明治39年(1906)～昭和61年(1986)

齋村(現鶴岡市)に生まれ、6歳の時に母の再婚先である東平田村(現酒田市)に養子になる。東田川農業補習学校を卒業し、昭和4年(1929)から製管業を営み、同23年(1948)に前田製管(株)を設立した。

また、昭和22年(1947)に東平田村議会議員になり、県議会議員、県議会議長を歴任し地方自治の振興に尽力。酒田商工会議所会頭としても地方産業育成のために貢献した。特に酒田市大火の際は、商工会議所会頭としてその進むべき方向を的確に示すとともに、低迷する企業に対しては、献身的な働きかけと援助を図るなど、復興の早期実現に貢献した。

昭和56年(1981)に庄内空港建設促進期成同盟会を設立し、自ら会長としてその実現に奮闘し、「ミスター庄内空港」と称された。たぐいまれな熱意をもって国に働きかけ庄内空港の実現に尽力しながらも、平成3年(1991)の庄内空港開港を目にすることなく亡くなった。

藍綬褒章、紺綬褒章をはじめ、建設大臣表彰、勲三等瑞宝章を受賞(受章)するなど数々の表彰を受けるとともに、昭和61年(1986)には正五位を授与され、没後の昭和62年(1987)、特別名誉市民の称号が贈られた。

相馬 大作 元酒田市長 昭和4年(1929)～平成26年(2014)

写真：酒田市広報提供

酒田町(現酒田市)に生まれる。酒田中学校(現酒田東高校)、早稲田大学第一商学部を卒業、衆議院議員秘書を経て、昭和46年(1971)5月に酒田市長に就任。以来、平成3年(1991)5月までの5期20年の長きにわたり、今日の酒田市の礎となる数々の事業を推進、達成する。

特に、酒田北港建設や庄内空港および東北横断自動車道酒田線の早期建設に全力を傾けて取り組むとともに、企業および観光施設の誘致や農業、社会福祉、教育、国際交流の各分野においても先進的な取り組みを積極的に実行し、酒田市の産業活性化や市民の生活向上に大きく貢献した。

昭和51年(1976)に発生した酒田市大火ではわずか2年半で復興事業を成し遂げた。

また、土門拳記念館を建設し、市長退任後は理事長として、施設の運営と写真文化の発展に尽力した。

平成4年(1992)に藍綬褒章、同20年(2008)には旭日中綬章を受章するとともに、同26年(2014)に従四位を授与され、没後に、特別名誉市民の称号が贈られた。

4. 街並みの変遷

時代とともに酒田の街並みは大きく姿を変えてきました。昭和、平成初期の街並みを写した懐かしい写真と、令和を迎えた現在の同じ場所を写した写真から、移り変わりを見てみます。

◆たくみ通り商店街 左：酒田大火前／右：令和元年(2019)6月



このあたりは大火の被害を免れ、現在も当時からの場所で営業を続けている商店が多いが、大火後の区画整理で建物は大きく変わった。

☞「ナイスさかた創刊1号」昭和59年(1984)10月 ナイスさかた編集部発行



「ナイスさかた」は、昭和59年(1984)に創刊された月刊のタウン情報誌で、求人情報、グルメ情報、ドライブ情報、イベント情報などが掲載されている。



「ナイスさかた創刊1号」に掲載されているたくみ通りの地図

◆中町商店街 左：昭和30年代頃／右：令和元年(2019)6月



現在ここには、平成30年(2018)に改修工事が完成したテント式の大屋根がかかり、噴水が設置されている。



皇太子ご成婚お祝いアーチ

昭和34年頃

中町商店街のアーチに、ご成婚を祝う看板が飾り付けられた。

◆柳小路 左：昭和50年(1975)／右：令和元年(2019)6月



通りの中央にマーケットが立ち並んでいたが、昭和51年(1976)4月に撤去された。酒田大火後は、ここに仮設商店街が建設された。



☞ **アメヨコオープン** 昭和51年(1976)

柳小路のマーケットが撤去されると、山居町にアメヨコが開店した。新鮮な魚介類や野菜を売る店が入り、2階では衣料品も売っていた。30年以上にわたり市民に親しまれたが、平成21年(2009)に惜しまれながら閉店した。この場所は現在ドラッグヤマザワになっている。

◆ **港座** 左：昭和49年(1974)頃 / 右：令和元年(2019)6月



映画館・港座は明治20年(1887)に芝居小屋として開業し、平成14年(2002)に閉館した。平成21年(2009)にリニューアルオープンしてからは、映画を上映するだけでなく、イベント会場や、ライブハウスとして利用されている。

上の写真の当時、「ハロー！フィンガー5」や浅田美代子主演の「しあわせの一番星」などが上映されていた。 左の写真：個人提供



☞ **港座の広告**
昭和24年(1949)頃

◆ **酒田駅前** 左：平成5年(1993) / 右：令和元年(2019)6月



駅前にあったジャスコ酒田駅前店は、駅前再開発事業として昭和50年(1975)にオープンした。平成9年(1997)に閉店し、現在は、酒田駅前再開発事業が進んでいる。

◆山居倉庫から見た新井田川沿いの街並み 左：平成／右：令和元年(2019)6月



レストランボレロ、本間電気工業(株)が見える。

◆新井田川と酒田市役所など 左：昭和38年(1964)10月／右：令和元年(2019)6月



上の写真中央に建設中の酒田市役所が写っている。その左は酒田電報電話局、右は前年に完成したばかりの市民会館。新井田川の護岸工事はまだ始まっておらず、川岸に草が生い茂っている。川の左側は山居倉庫。東宮殿下行啓記念館が見える。庁舎は翌39年(1965)に竣工した。

市民会館(希望ホール)は平成16年(2004)、酒田市役所は平成29年(2017)に建て替えられた。新井田川には山居橋が架かっている。

◆旧琢成小学校 左：昭和51年(1976)／右：令和元年(2019)6月



旧琢成小学校の校舎は昭和8年(1933)に完成した。俗称「大学校」の名にふさわしい大きな校舎で、「東北一の威容」と言われた。

昭和50年(1975)に光ヶ丘小学校と合併して新しい琢成小学校が開校すると、旧琢成小学校舎は中央公民館として使われ、昭和57年(1982)に、この場所に酒田市総合文化センターが建設された。

◆日和山公園のひょうたん池 左：大正／右：令和元年(2019)6月



上の写真は、大正4年(1915)に大改造が行われた後の日和山公園。手前にひょうたん池が写っている。その後、昭和、平成と姿を変えずに親しまれてきたが、現在は埋め立てられ、花壇や枯山水の庭が整備されている。



☞ 日和山のポニー

六角灯台そばのポニー小屋では2頭のポニーが飼育されていた。ポニーは高齢のため、平成19年(2007)5月30日にお別れ会を行って日和山公園から引っ越し、老後は庄内馬事公苑(旧ゆのはまランド跡地内)で過ごした。現在は閉苑している。

◆料亭小幡 左：平成初期／右：令和元年(2019)6月



小幡は明治の初め頃に創業し、平成10年(1998)に廃業した。平成21年(2009)のアカデミー賞を受賞した映画「おくりびと」のロケ地に使われ、観光スポットとしても人気を集めた。

◆新内橋から鳥海山を望む 左：昭和／右：令和元年(2019)6月



新内橋は昭和29年(1954)に架けられた。現在、老朽化のため架け替え工事を行っている。

◆建設中の酒田産業会館 昭和42年(1967)頃



酒田産業会館は、昭和42年(1967)に建てられ、商工会議所、酒田市物産館、荘内銀行、労働金庫などが入り、地下1階にはレストラン櫂が入った。完成から52年にわたり酒田の産業界を支えてきたが、老朽化が進み、現在建て替え事業を進めている。



☞ レストラン櫂

櫂は、今年5月6日に惜しまれながら閉店した。オープン当初の支配人は、グリーンハウスヤル・ポットフーの支配人を務めた佐藤久一氏、コックは酒田フレンチの礎を築いた第一人者として知られる太田正宏シェフなど3人が務めた。

左：荘内銀行酒田中央支店開店時の広告

昭和42年(1967)

右：現在の荘内銀行酒田中央支店

令和元年(2019)6月

